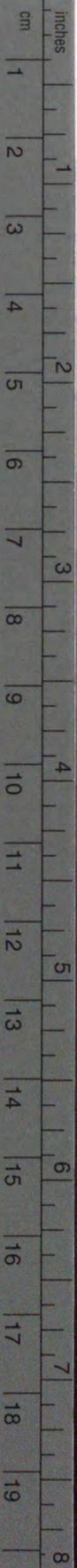


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

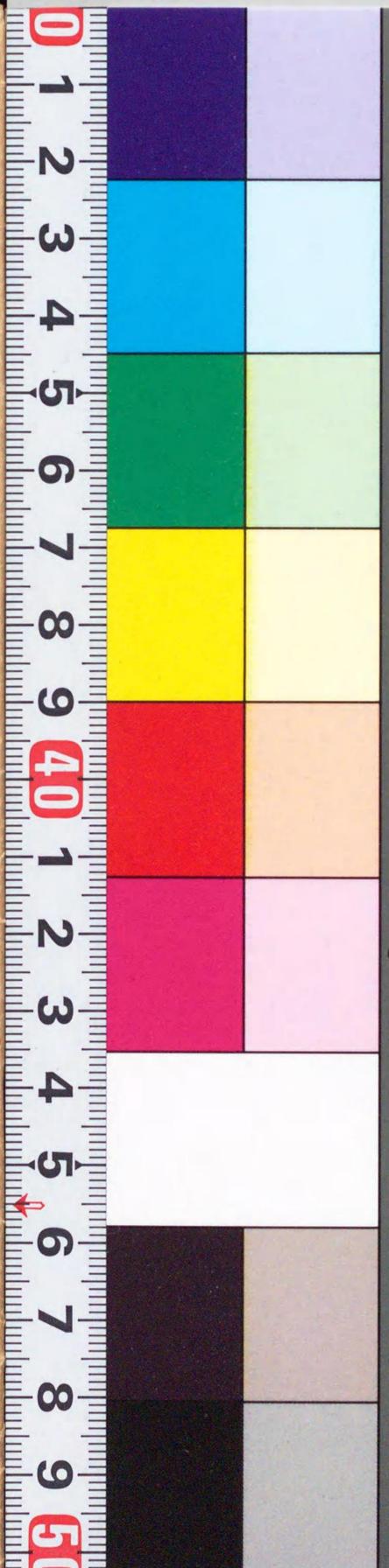
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Y994  
J4287

册第十五(昭和九年五月)

叢A  
81  
17

叢A  
81  
17

暹羅の日本町

東恩納寛惇君

外務省文化事業部



10. 4. 10

Y994  
J4287

叢A  
81  
17



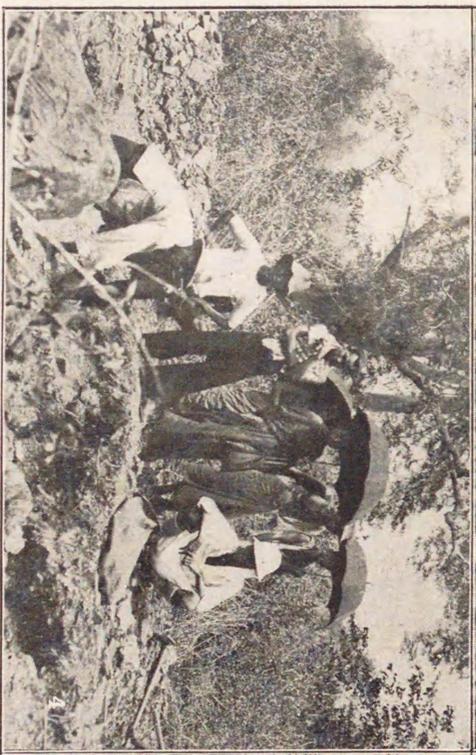
I種  
W



(3) アニチャヤ日本町船堀跡



(1) 發掘場に於ける矢田部公使(中央)

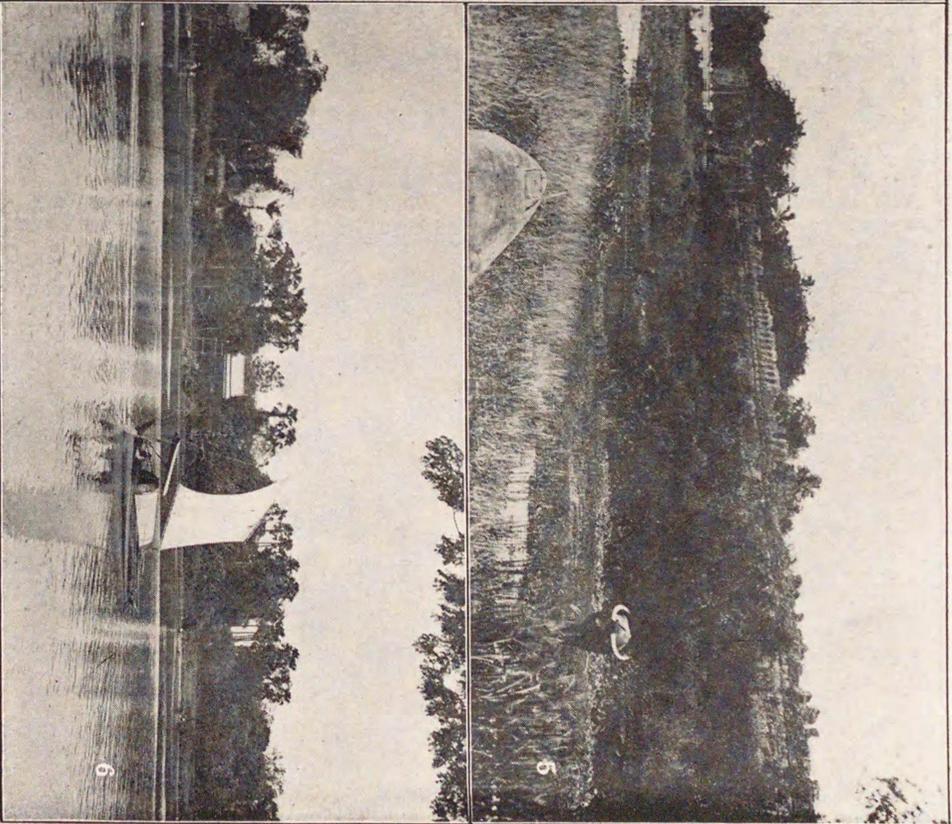
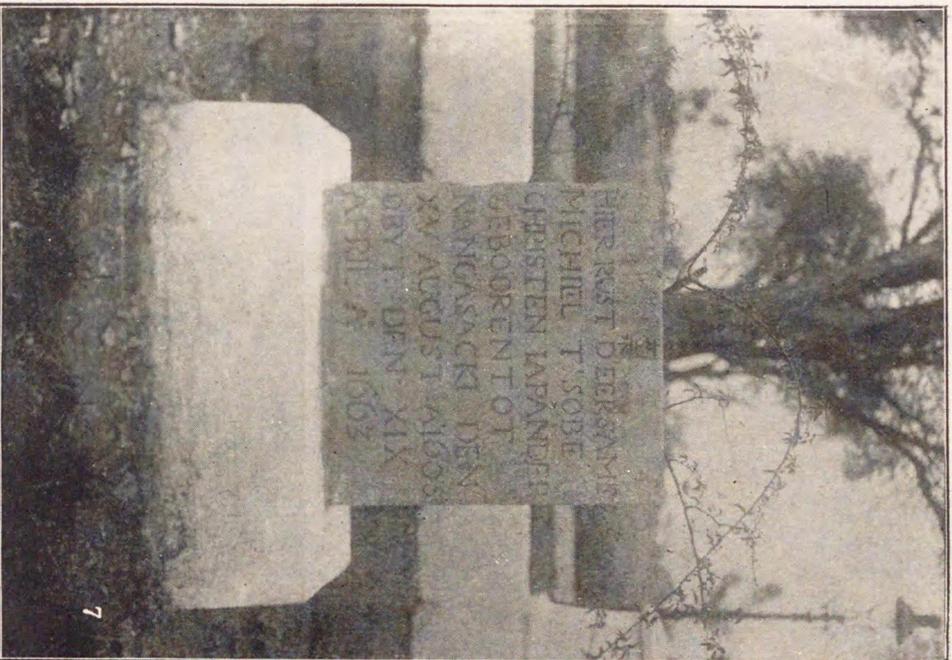


(4) アニチャヤ日本町跡發掘作業



(2) アニチャヤ日本町日本館跡

(7) ミカエル兵衛の墓碑(スマビヤ日本總領事館内)



(5) 六崑園山田長政の居城 (6) アニチャヤ日本町よりガルトガルトを望む

# 暹羅の日本町

東 恩 納 寛 惇

東恩納氏は、府立東京高等學校の教授として、國史專攻の方でありまして、特に南方諸國との交通關係に、非常に深い御造詣があります。

最近南支、佛領印度支那、暹羅方面を視察され歸へられた許りの所、非常な御多忙な中を慇々お繰合せ願つて講演を承はることに致しました。

私は昨年中南支南洋方面に旅行致して居りまして、就中暹羅の方面に、百日間滞在を致して居りまして、彼方此方旅行もし、又昔の日本町の跡なども見て参りました。その旅行中に、矢田部公使閣下の非常なる御援助を戴きまして——物質的にも、精神的にもお世話になりました、今回些少ながら、私が物を持歸り得ましたその事に就きましても殆んど全部同公使閣下の御援助に俟つたのでございます。此事は、私が本夕のお話を申上げる前に御報告を申上げまして、謝意を表したいと思ふのでございます。

私が先般旅行致しました當初の出發點は、日本を中心として、主として十五六世紀以前の南支・南洋方面との交通資料を蒐集したいといふ譯でありました。

明治八年から拾貳年までの琉球の廢藩置縣の際に、總て文書といふ文書は皆當時の外務省の所管に引上げられて行つたのでありますがその中に歴代寶案といふのが、四百八十冊程あつたやうであります。それは當時の外交文書を抜つて居りました久米村に保管されて居まして此方に參つて居りませぬ。その書類の事は、色々のものに、その書名だけは出て居りますが、その現物は今日まで見付からなかつたのでございます。

昭和七年の十一月に私が彼方に參りました折、偶然それが天尊廟といふ廟の中に秘藏されてあるのを發見されました。私も一通り眼を通して參りました。その外にも家々の系圖などが澤山ございまして、その中に、十五六世紀頃に琉球と南支南洋方面、取分けて暹羅、スマトラ、ジャワ、ボルネオ方面との交通の記録が散見して居ります。その外にも又當時の辭令書の現物なども多少残つて居りまして、それ等の記録を綜合して、此の世紀の頃に、南洋方面との交通が可成り頻繁であつたといふことのヒントを得て居つたのでございます。

琉球と支那との交通といふことは、是は一三七二年が始めでありまして、その頃の琉球から持つて行きました貢物は、大明會典に載つて居りますが、主に南洋方面の生産物であります。象牙であるとか、蘇木であるとかといふものであつて、さういふ點から見まして、支那との交通以前に於て既に南洋方面との貿易が旺んに行はれて居つたといふことを知つたのであります。

さういふ多少の豫備知識を有つて居ります所へ、此歴代寶案といふものが見付かりまして、私は非常に喜んだのであります。

是は、私が旅行に立ちます前に、下準備として大略目を通して參りましたが、今回もう一度參りまして、萬曆以前に關するもので残つて居るものは、全部筆寫をして參りました。その記録といふものは、十五世紀の半ば頃までに亘つての、如上の諸國との外交上に關しての往復文書の寫しであります。その中には、往復の使者に立つた人々の名前も出て居ります。又品物も悉皆出て居りますし、非常に有力な資料であります。所が是は漢字で以て土地の言葉を寫したものでありまして、なか／＼見ても分りませぬ。所が十五世紀の初に、南洋方面に探險した明の鄭和の一行の書きました星槎勝覽や瀛涯勝覽にも、此の方面には廣東漳州人最多と見えて居りまして、廣東人の音に依つて、是等の品物及び人名は書取られて居るといふことを考へまして、その廣東人若くは海南人に就いて、その音を調べ、それをその土地々の言語に充當して、實物を突きとめて見度いといふのが、私の旅行の發足點でございます。

そこで本題に入ります前に、私は此の久米村といふものに就いて多少お話をしなければならぬと思ふ。是は元は久米村、今日は字久米と言つて居ります。土地の者又支那の書には、唐營と出て居ります。後に字を變へて唐榮ともなつて居ります。是は支那人が、南洋の日本人町を日本營と申して居りますやうに、支那人町といふ意味であると思ふのであります。丁度明の洪武の頃に交通が開けまして、交通に便する爲に唐營三十六姓を送るといふことが、ものゝ本にも出て居るのであります。此三十六姓、或は書物に依つて三十六家の舟工とも書かれてゐますが、これを實數の上から考へて見ますと、その意味がはつきりしないのであります。支那人の記録に依りましても、金と

か梁とか、林とか、鄭とか、蔡とか言つたやうな姓が三十六種程あつたといふ風にも考へられて居つたのでありますが、併し是等の三十六姓の移民が一三七二年に参りました時に當時の、琉球の政府に於きましては、此時に今日の久米と久茂地の二個字を合せたもの即ち現在人口七萬の那覇市の約二割に當つて居る大きな面積を當てがつて居つたのであります。その面積の歩合から見ますと、僅かに三十六人そこくの小人數ではないといふことを私は感じたのであります。色々調べて見ますと、南史などにも十姓八氏三十六姓、皆非梁代之腹心など云ふ用例もありまして、又三十六鱗であるとか、三十六峯であるとか、三十六策であるとか、日本でも三十六歌仙であるとか、色々三十六といふ數字の使ひ方があるのであります。又秦の始皇が三十六郡を天下に置いたといふこともありまして、さういふ點から考へまして、是は、九九・八十一の陽數に對する六六・三十六の陰數であり、天數に對する地數であつて實數ではないといふことを私は考へたのであります。後に清の康熙十七年に行きました張學禮が、三十六姓を送つて三十六島を教化すといふ對句も使つてありまして、單なる文修であつて、實數ではないといふことを私は考へたのであります。さういふことを考へますと、その移民を置いた所の面積と對應して、此移民といふものは、相當の數であつたであらうといふ事を考へたのであります。

私は南洋方面を彼方此方通りまして、南洋華僑といふものゝ勢力が偉大なものであつて、到底之を今日どうすることも出来ない状態にあるといふことを痛切に感じました。此南洋華僑の事に就きましては、矢田部公使閣下には特別に御研究のやうでありまして、私もその御研究を拜見致して啓發されたことが多かつたのであります。その實地を目撃致しますと、豫想以上にその勢力が恐ろしいものであるといふことを感得致しました。

私が乏しい記録に依つてその沿革を調べましたその結果に依りますと、南洋華僑の出發は一四〇五年以後であるのに、琉球方面に行きましたのは一三七二年で、約半世紀も以前であります。

その點から考へまして、琉球の三十六姓の移民は南洋華僑の先鞭であるといふことを私は感じたのであります。所か、當時是等の移民に對して琉球の政府に於て如何なる處置を執つたかと申しますと、是は唐營といふ一つの居留地に置きまして、その全部に扶持米を支給して居りまして、是は後にその記録もございませぬ。歴代寶案の中にもございませぬ。文字のある者は外交方面の文書の扱ひに使ひ、文字のない者は通辯として使つたといふことが出て居ります。文字のある者も一切之を外交方面に使用した譯であります。その代りに當がひ扶持を致して、是等の移民が別に自らその生計を稼ぐ必要も、機會も與へなかつたのであります。是は勿論優待して居るので、詰り客分として扱ふといふ名目であるが、その宛行扶持は一人に就いて幾らといふことではなく、全體として支給してこれを十五歳以上の男子に頭割に割當てる制度になつて居たのであります。隨て人口が増え、一人前の付届けが少くなるといふ仕組になつて居ります。久米と云ふ地名の意義は明瞭でありませぬが、彼等自身の傳へに依りますと、「世祿の義を取つて、久米と云ふ」としてあります、勿論これは附會の話であります、この世祿と云ふ事を如何に重要に視て居たかゞこれによつて視はれます。

私は斯ういふことが、琉球方面に行きました移民——華僑といふ者が呼寄せ移民をしなかつた重大な原因であると思ふのであります。

現に萬曆の頃に琉球より致しました文書の中に、「段々と唐榮の人口が減る一方であるから、もう一遍寄越して欲

しい」といふことになりまして、阮・毛二姓を送つたといふことが當時の記録にあります。その人口が殖えなかつた理由は、私は宛行扶持の關係であらうと思つて居ります。さうして又呼寄移民をしなかつたといふことは、此等の移民が早くその土地に同化する原因にもなつたであらうと思ひます。現に明一代に於きまして、是等の移民は全部明の服装をして居つたのでありますが、明滅んで清興つた時に支那本土が窄袖辮髮の風に變つた頃に、琉球の服装に變つて完全に琉球化してしまつたのであります。後にはその區別も分らぬ位になりました。私は此點から考へまして、若し南洋華僑といふものをその當時琉球に於て單に之を放任して置いて勝手に生活をし、商業工業に進出する機會を與へたのであつたならば、今日どういふ状態になつて居つたであらうか、恐らくは南洋の恐るべき華僑と同じく此琉球方面の華僑が跋扈して居たであらうといふことを考へまして慄然として寒心したのであります。私は當時の爲政者が先見の明があつてやつたのであらうかどうかは知りませぬが、その結果といふものは、吾々に取つて非常に幸福な結果を齎したものであるといふことを感ずるのであります。のみならずこの移民の中から程順則といふ人間が生まれ、是が六諭衍義を支那から將來致しまして、島津吉貴を通じて八代將軍吉宗に獻じ、是が享保六年から明治四十四年に至るまで日本の庶民教育の教科書として忠孝朴實の美風を養成する事に與つて力があつた。さういふやうなことから考へますと、南洋華僑の中に於て日本國家に利益したものは、此琉球方面の華僑のみであるといふことを感ずるのであります。その華僑をして斯うならしめた當時の政治家に對して感謝しなければならぬと思ふのであります。

兎に角さういふ移民が遺して置きました歴史寶案といふ記録に依つて私は出發致しまして彼方此方調べて参りました。その人名又は物名等に就て多少マア七分通りの解決をすることが出来ました。私の今日のお話の目的は其處には

ありませぬ爲にそれを詳しく申上げることが出来ませぬが、話の序でに一二お話を申しますと、琉球更紗といふものを美術學校方面でもお調べのやうで、此の琉球更紗が日本の友禪の元であつて、是は琉球に於て發達したものであると從來考へられてゐたやうであります。その染料等も琉球に在來存在して居つたものであるといふことを言うて居るのでありますが、私が調べました記録に依ると、暹羅、マラッカ方面から参りました品物の中に、何々花布といふのが澤山ございます。その中に上水花布といふのがあります。是はどういふものであるかと考へて居りましたが、瀛涯勝覽にアユチャの町からして、支那の二百里行つた所に一つの町があつて、其處には花布が出来る。その土地を上水といふといふことが出て居ります。今日行つて調べますとメナムの上流附近を上水と今日も支那人は申して居るやうでございます。さうしてその近所はビルマ方面の通路に當つて居るのでございまして、私は是はメナムの上流方面の上水から生産される更紗であつて、十五世紀の頃に既に琉球の方面に行つて居るものであるといふことを考へたのであります。所が此の琉球の更紗の中には花鳥のデザインであるとか或はその彩色であるとかいふものに於て、琉球にないものが多いのでございます。それは今日まで誰も疑問に思つて居りませぬで、あの花鳥のデザインを以て、幼稚な爲にあつたものを描いたのであらうとか、綺麗にといふので空想的にあつた彩色をやつたのであらうとか考へて居りませぬが、私がバンコクに居る間に、斯ういふ更紗が店先にあるのを見付けまして、取つて來ましたが、デザインといひ、彩色といひ、琉球更紗と同じでございます。それで私は琉球更紗の中に見る花鳥も空想ではなく、やはり種があつて此の更紗の中に出て來るといふことを直感することが出来ましたのでございますが、此更紗型といふものやはり十五六世紀頃の交通の結果來したものであつて、本來向ふの土地に發達したのではないといふこ

とを感じたのであります。殊に琉球更紗に使ふ赤い顔料なども珍らしい染料と思つて居りました所が、スマトラの更紗は矢張之を使つて居ります。是は植物性の染料である。さういふやうなことから考へましても、日本内地の今日の美術工藝等の元祖を調べますに就きましても、やはり十五六世紀前後の交通といふものが、念頭になければならぬといふことを感じたのであります。

私はグラハム (W. A. Graham) の書いた暹羅の歴史の本に依りまして、ビルマ境、安南境のラオの風俗が琉球の風俗などと似て居ることに興味を覚えてラプレーまで出掛けて行つて見ましたが、髪結び方から、簪まで同様でありました。後に廣東の土人の使つて居ります簪を手にいれました。その廣東人の先端が平たい形になつて居り、琉球のは先が丸いのであるが、その全體の形は同じであります。是は慥かに變化したものであつて、元は同じであるといふことを考へて居りました。私が昨年暮まで琉球に居りまして、色々調べて居ります内にある田舎からして昔から先祖代々御神體として祀つてある箱があつて、その箱を開けて見た所簪が入つて居りました。それを持つて來て私に見せて呉れました。その簪が先が平たくなつて居りました。是は面白いと思ひました。何時何處から來たかといふことは、まだそこまで調べて居りませぬが、先の平たい簪が御神體として祀られて居るといふことは、是は古い傳來のものであるといふことに相違ない、是も又吾々の扱つて居る交通史の上に一段の光明を齎らすものであるといふことを考へまして、非常に興味多く思つて居る次第でございます。

又此色々の品物に就きましては段々お話する機會がありませうが、私は是よりアユチャの日本町の發掘状態を、その品物に就いて一々御報告したいと思ふのであります。

アユチャと申しますのは、御承知の通り今の暹羅の首府バンコクよりメナムの河を北に四十二哩遡つた所にございまして、一三五〇年から一七六七年までの首府でございます。此街が一七六七年にビルマに攻略をされまして、殆んど二年近くも攻圍をされまして、悉く灰燼に歸しました。宮殿樓閣を始めと致しまして、全體の街が皆潰れてしまひました。我國との交通その外の南洋各地との交通も亦皆このアユチャで開かれて居つたのであります。今日も尙ほ彼方此方にその遺跡が存在して居るのであります。此處に掲げましたのはショウモンの地圖であります。是はフランス人のノエルベリー氏の南洋の日本町といふ論文の中にショウモンの地圖として引用してあるものであります。是は一六八九年であります。所が私が實際此のショウモンの本を調べた限りに於ては見當らないので、外の版に載つて居るのかと考へますが、私が彼方此方調べました範囲内では出て居りませぬ。仍つて或は是は著者の思ひ違ひであつたかといふことを近頃私は疑問を有つて居りますが、是はもう少し時日を興へて調べさして戴きたいと思ひます。それまでは一六八九年のショウモンの地圖として承認させて戴きます。

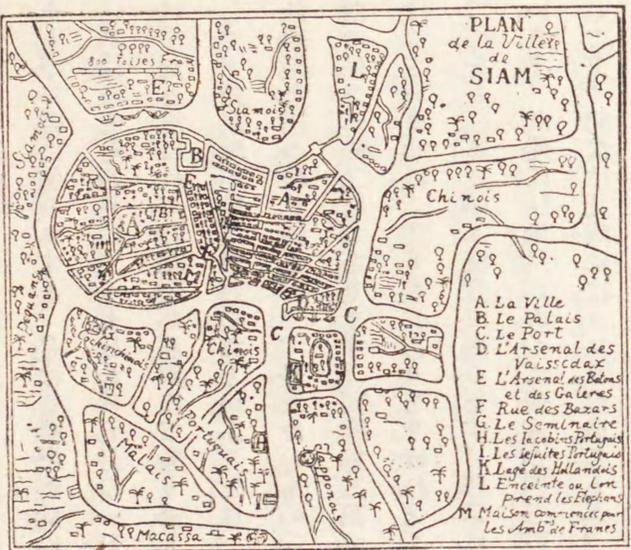
バンコクから四十二哩、汽車で二時間許り行つて、其處からメナムの河岸に出まして、それから又一時間許り小舟に乗つて河を下つた所に日本町があるのでございます。是が(圖示)メナムの本流でございまして、是は宮殿その他の家來達の住んで居る町であります。此處(圖示)に支那町がありまして、是がポルトガルの町であります。此の教會の趾、寺院の趾が今日も残つて居ります。

是は(圖示)日本人町とされて居ります。此處に四角のものがありまして、是はオランダの町であります。此地圖には斯ういふやうな大體のアウトラインだけであります。内部の狀況は詳しく分りませぬ。たゞ此處に丸い池のやうな

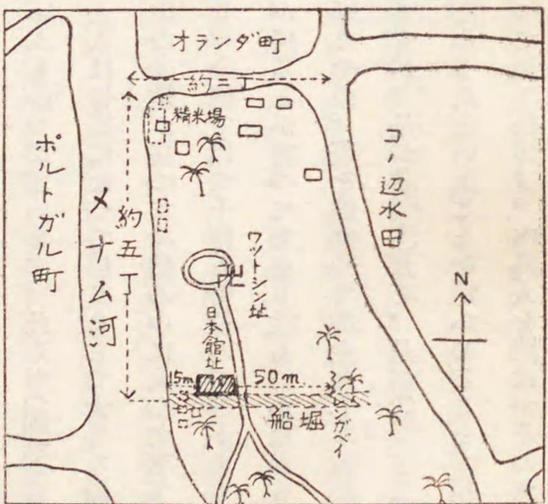
ものが圖面に現はれて居りますが、是は池と云ふ説もあり、又現に小さい池があるにはありますが、この二重線の描法が、他の城壁や宮殿などの外廓と同じ約束になつて居りまして直に池であるとは考へられませぬ。殊に又是が池であるとしみますと、この長い線も水路と見るべきであります。河の流れと逆に流れ込む事になり不合理に感ぜられます。旁々これは池であるとは考へられませぬ。丸いものゝ中に小さく何か書いてありますが、是はどういふものかはつきり致しませぬ。此邊(圖示)彼方此方に砂糖椰子があつて、今日尙ほ此地圖の位置に残つて居ります。此位置から申しますと、此處にメナムの本流があつて、此處に堀割がある、此堀割は一六九八年にケンベルの書きましたのものにはありませぬ。私が實地に行つて見ますと、河筋に當る地點が少し窪地になつて居りますが、私の行きましたのは四月の末から五月の始で、乾季で水のない時でありますから窪地になつて居つたので、話に聞きますと、雨季になると河になるといふことであります。所がケンベルの地圖には是はございませぬ。

さういふ點から見まして、此のケンベルの地圖とシヨウモンの地圖とは、雨季と乾季の地勢の相違であつて、一方は水の通つて居る時期の地圖であり、片方は水の通つて居ない頃の地圖であらうといふことを考へたのであります。さういふことを考へて見ますと、此邊の地勢は雨季に河になり、乾季に窪地になるといふことは、今も昔も變らぬと思ふのであります。従つて地圖に現はれてゐる地形が大體今日と大差ないものと認められます。

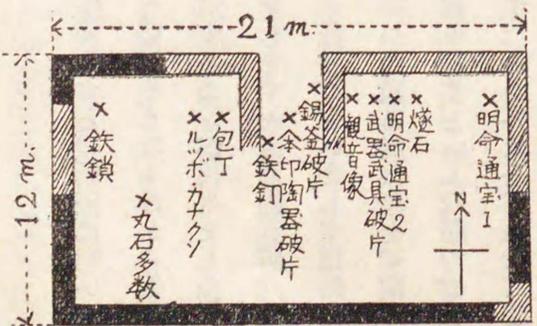
此日本人町の北側にある堀割は今日も存在して居りますが、淺くなつて居ります。オランダの町には煉瓦の岸壁が残つて居りますが、日本人町には残つて居りませぬ。大部土崩れも見えますが、併し今日残つて居るオランダ岸壁と同線上にございます點からしてこれ亦大した變化はしてゐないと認められませう。三方斯ういふやうに水であります



シヨウモン地圖



日本町圖



發掘せる日本館址(圖中の斜線が現存の部分)

が、南の方の一邊、是ほどの地圖にも書いてございませぬ、是はどういふ區分けになつて居るか分りませぬが、此邊の所に少し窪地になつて居る所がございまして、今日は土地が非常に柔らかくて物を作つたりなんかして居りますが土人の口碑に依りますと、是は昔船堀が此の邊にあつたといふことを申して居りました。

私は此處を四月の二十七日から五月の一日まで掘つたのでありますが、此邊を掘つて居りますと、船底に附いて居つたと思はれる牡蠣殻が多數出て参りました。又船釘なども可成り出て参りました。さういふやうなものからして、此窪地が船堀であつたといふことは、大體間違ひのないものであるといふことを斷定することが出来ました。此船堀を南の境界線として、是だけのもの(圖示)が日本町(日本營)であります。是は實測をしますと南北約五町、東西の長さが約二町であります。面積約三萬坪といふものでございます。此方面(圖示)は悉く藪でございまして道路でございませぬ。道も多少ありますけれども、土人は皆裸になつて居りまして大きな鉞を持つて通る度に藪を切開いて道をあけるといふ程度であります。非常に澤山の赤蟻が居つて身體の中に入つて來て身體中刺すといふ状態でございます。此邊に精米所があつて農家が四五軒あり、全體で以て十四五軒位のものがあります。その外は全部藪でございませぬ。前には此處にはコブラが居るとか、虎が居るとか言つてあまり誰も行かなかつた所であります。此中を墨繩を引張つてその面積を測量するといふことは出来ませぬ。藪を焼拂つて坊主にしなければ測量は出来ない。私はそれで岸に沿うて水上から目測をして來たのでありますが、是が(圖示)五町、是が(圖示)二町と考へました。所が後になつて此私の目測した距離は甚だしい間違ひではなかつたといふことを慥かめることが出来ました。それは一六一四年に、暹羅の政府からして、此メナムに沿うて住つて居る住民は、内外人を問はずその河口に沿うて居る間口の長さだ

け、岸壁を一尋掘下げて拵へ直すやうにといふ法令が出ました。それに依つて一六三四年にオランダが本國から職人煉瓦職工、大工などを呼寄せまして護岸工事を致しました。是はオランダ商館の記録にございます。その時の記録に依ると三百エールの岸壁を造つたといふ、之を換算して見ますと二町四十五間になります。従つて是れより幾分短か目の長さを持つて居る日本町の東西の長さを二町と私が見たのは間違ひではなかつたといふことが判りました。又之から(圖示)見て五町といふのは大した間違ひではないといふことを考へるのであります。此の煉瓦で造つた岸壁が今日も残つて居る。隨てそれと同じ線上にある日本町の西岸も大して土崩れをしてゐないと考へるのであります。

この土地の發掘に就いてはこれは政府に發掘願ひを出しまして、發掘品は全部暹羅の政府に提供すること、又發掘場所は原形に復すること、又發掘の費用は自分持ちといふ條件を以て許可になりました。その發掘の費用に就きました、矢田部公使閣下其の他の有志の方々の御寄附を仰いだのであります、これを發掘しまして一旦政府に渡したのであります、公使館の手を経て下附願を出しまして、暹羅の博物館の總裁をしてゐられるビデヤ殿下にお願ひしまして、その結果是等の品物は暹羅の政府に取つても面白いものであるが、日本の政府に取つては尙ほ面白いと思ふ故に、下げ渡すといふ返辭で以て下げ渡されたのでございます。發掘の方針としては片端から掘るといふことは出来ませんし、又それは藪を全部焼き拂つてからでないと手を着けることが出来ません。又時期が大變悪い時で鶴嘴で以て割るのでありますから却々仕事が容易でない。又柔い土地をこそぎ落して遺趾を洗ひ出すといふことは思ふやうに行かなかつたのでございます。残念な事ではあります、萬已むを得なかつたのであります。

そこで先づ遺蹟と思はれる所をあちこち試掘をさせまして、目星しい品の出た所へ全力を集中すると云ふ方針を以

て取り掛りました。この船掘りの端に接近をして掘りました處に二、三尺位掘つた處から陶器の蓋物が出て來ました。この邊からは佛像はあまり出ず主に商品であつたらしい（糸底が汚れてゐませぬ）陶器の破片が出て參りまするので、多分住宅のアトであらうと思つて此處を掘れといふので、全力を集めて掘つて行くうちに煉瓦の礎石——近頃の煉瓦は小さいものでありますが、これは非常に大きい物で、斯ういふ煉瓦が出て參りました。左右に掘り擴げて行きますと、所々斷れて居りますがまづ大體に於て、南北十二メートル、東西二十一メートルといふ煉瓦の礎砌を發見しました。その煉瓦の礎石が約二尺位の高さに平らに全部なつて居つて、積み上げた壁の殘片とは認められませぬ。——その内部からしまして斯ういふ瓦が出て參りました、今日も使つて居るものでありますが、さういふ風に考へますと、アユチャの金持の家の造りは、木造の二階建で上に土の瓦を載せてあると云ふファンフリートの記録に大體相應するやうに思はれます。瓦が大分出ましたが一つ持つて參りました。礎石によつて家のプランを見ますと切り込みがありまして、これは全部は見當りませぬが、この邊は雨季中に水牛を遊ばせる所に利用されてゐまして、その爲めにガラ／＼とスロープになつて居りますそれで崩壞したものだと思はれます。船堀りから表へ通り抜ける通路であつたらうと思はれます。斯ういふやうに表から裏へ通り抜ける家の建方は——今日では名古屋方面或は大坂方面とか九州にあります。それを暹羅方面に行つて居つた人々が、主に關西方面の人間であるといふことと、考合せまして、さういふ流儀を採り入れたものであらうと考へられます。この館跡が約七十坪ほどありまして、その内部を掘つて見ますと、この東側から致しまして、斯ういふ刀の破片が出て參りました。四つに折れて居るが、斯ういふのが出て來ました。これは多分脛當の破片、武具の破片、これは明かに日本刀であると思ひます。

斯ういふ火燧石が出て居りました、それから斯ういふ一寸八分の觀音様が出て來ました。西側からは此の釜の底、斯ういふ鍋の破片或は又埵塙、鐵の鎖、金糞これは大分出しましたが、その一部分を採つて來ました。それから庖丁、鉞、船釘、陶器の破片も大分出しましたが、中には斯ういふ風に余といふカマ印の附いたものなども出て參りました。斯ういふ丸い石が大分出て參りました。そこで此の出て來た品物から類推しまして、東半分が客間乃至居間で、西半分が物置又は仕事場であつたといふことが斷定出來ると思ふのであります。館跡から西の方へ約五十メートル行つた地點に、これは水牛の通路になつて居りますが、——その邊に煉瓦の露出してゐるところがありましてそれを掘り擴げて見ますと南北に走つてゐる煉瓦塙の跡である事がわかりました。この煉瓦塙は多分この館に屬するものであつて、南北の方向に走り、或地點に至つて東西に廻り、屋敷と寺敷とを區劃するものと思はれます。

そこで吾々の掘り出しました品物に就て申上げますと、第一に觀音像といふものがこれは非常に、有力なものであらうと思ひます。それは當時の記録の中にも、あちこちに漂流した者が何處そこの觀音様を信じたといふことがございますし、又御朱印船の役名を書きました中に、香工ヒョウコンといふものがありまして、毎朝佛菩薩に香花を奉つて航海安全を祈るものなりといふ註書きがございます。さういふやうなことからしてこれは御朱印船に祀つてあつた物としては粗末であります。乗組員の誰かど持つてゐた物、兎に角日本人町の遺物であつたらうと思ふのであります。

暹羅は御承知のやうに小乗佛教の國で、釋迦像は澤山出ますが、觀音像は見當りませぬ、それが日本町の館の跡から出て來たといふことは非常に私に懐しく思つた次第でございます。

此處に埵塙の破片がございますがこれはその底の工合から見ると相當大きな埵塙でございますが、クンロワンハ

ワットの陳述書」と題する暹羅文の書物がありましてこれは一六七六年アユチャが滅びた時の王の兄に當るハーワット親王がビルマ軍の捕虜になつて、ビルマ國王の面前に於て暹羅の事情を陳述した事がありまして、其聽取書でありまして、元ビルマ語で記録されてゐたのを後に暹羅文に翻譯されたといふ本でありますが、その中にビマンチャイ宮殿の中へ日本人が四人抜刀で斬込んで行つたといふ記事がありますが、その事の起りは日本人が持つて行つた品物を買ひ取つて代價を渡す時に、質金を掴ませた爲めに、日本人が怒つて抜刀で斬込んで行つたといふ、さういふ記録を見ますと、在留日本人なども金銀の吹分けをしてゐたものかと思はれます、そこへかう云ふ坍塌などの残つてゐるのは興味が多い事と思はれます。

それから鍋や釜の破片が出ましたが、これは、カーブの工合から見ますと、相當大きなものであつたと思ひますがこの底から見ましても、この釜なども餘程大きなものでありまして、この大きな鍋釜の存在によつて、此の館に多數の人が宿泊して居たか左もなくば此處が、多數の人の炊出をする本部になつて居つたものであらうといふことを斷定してよいと思ふのであります。暹羅の國には鐵釜はありません、皆土釜であります。この鍋釜なども日本から持渡つたものかと思はれます、同時に又在留日本人が日本流の生活をして居つたのであらうと想像して見ました。

それから斯ういふ石が船堀の跡から、此の邊から多數出ました。その一つを持つてかへりましたが、何だ〜といふことを皆が言ひまして、大砲の彈に使つたのであらうといふ人が大分ありましたが、此の石は暹羅にはありません。メナムの上流まで行つても全部泥でかう云ふ河石はありません。これは急流の産物であります。

暹羅の國は大部分がメナムのデルタでありまして、この附近にもかういふ石はありません。ところが貞享四年（一

六八七）暹羅から秀忠に送りました書面の中に、斯ういふことが書いて居ります。色々のものを書きました中に金銀細工物の外に「併買裝石種」と云ふ文句がありまして、長崎通事の翻譯には「その上船の下積石迄その元にて買申體御座候」と見えて居ります。これは必ずやその下積石であらうと思ふのであります。勿論下積石は大きな石も使つたのであらうが、然しながら斯ういふ石を倭に詰めて使つたと云ふ事も考へられます。然らば何故に下積石を必要としたかと申しますと、當時暹羅の國から日本へ行きましたものは鹿皮、象牙、蘇木等が主たるものでございます。かう云ふ原料品に對して、日本から出ますものは、金銀細工類の貴重な工藝品であります。従つてその船脚が足りません爲めに、下積石を使ふ必要があつたのであらうと考へられます。

さうなつて行きますと暹羅の手紙の中にある下積石なるものが、日本人街の館の物置の中にあることから見ますと日本の御朱印船も亦日本から出る時には下積石を積んで出たであらう。暹羅から物を持つて来る、日本から石を積んで行く、これは日本に取つて大變な輸入超過であつて、この貿易が面白くないと思はれますが、果してこの時代からかう云ふ事が原因となつて貞享三年の長崎貿易額の制限となり後に又新井白石の長崎新令となつたのであります。

大體吾々の取出したものは斯ういふものでありまして、別に又陶磁器の破片も可なり多數出ましたが、その道の専門家の鑑定に依りますと、明末清初の物が多數であるやうであります、日本品が見當らぬのを物足りなく思つたのであります、日本の磁器は慶長以後の發達でありまして、支那では已に古くから磁器を輸出し、星槎勝覽暹羅國の條にも「貨用青白磁器」と見えて居りますから、支那産の陶磁器が発見されたからと云つて、格別怪しむに足らないと思ひます。大體斯ういふ風でありまして、話をして見れば他愛のないものでございますが、然し今日の南洋方面の日

本町と申しますのは、どちらに行きましても殆んど目星しい見當が付いて居りません。殊に爪哇の如き昔のヂヤカタラの地が今日も判然と残つて居り其處には多數の日本人が行つて居たのでありますが、どの邊でどう云ふ生活を営んでゐたかと云ふ事は今日少しも判つて居りませぬ。

たゞ、バタビアの總領事館の官邸に宗兵衛(Michael Sobé)の碑といふのがありまして、これはみかえる・そうべいが一六〇五年(慶長十年)八月十五日長崎に生れ、一六六三年(寛文三年)四月十九日に此の地で死んだといふことが書いてあります。これは元支那人の家の溝のハメ石に使つて居たのを、イギリス領事が知つて日本領事館に知らせて、それを日本の領事館が買取つて總領事官邸に持込んだものであります。ところがその宗兵衛碑の裏を見ますと、留愛碑といふのが書いてある。その宗兵衛碑と留愛碑とは逆様になつて居りまして、留愛碑を縦に見ると宗兵衛碑は逆になつて居る。宗兵衛碑を縦に見ると留愛碑が逆様に彫込んである。どちらか一つを利用したのであらうと思ふ。この留愛碑と宗兵衛碑のいづれが利用したのであるか、それは判らないが、留愛碑の下にある漢字は摩滅して判りませんが、下半分に碑を建てた人々の名十四五人も刻んでありますが、それが皆陳氏であります。この陳氏は廣東や福建に多い氏名でありまして、星槎勝覽にも陳祖義と云ふものが一族を率ゐてこの邊に據つて居た事が見えて居り、この陳氏の一門がこの方面に發展して居た事は想像されます、それ故にこの留愛碑の研究も面白い事と考へて居りますが、そこまで十分手が届いて居りませぬ。

話が、餘談に互りましたが斯ういふやうな風でございまして、南洋の日本町は案外判つて居ない。その中でシヤムの日本町についてその片鱗なりと申上げることが出来たのは、先づ吾々の微力、又短い期間に於ての仕事としては、

聽いて戴くだけの價值はあると思ふのであります。次に私は日本町といふものがどういふ風に興つて、どういふ風にして滅んだかといふ事に就きましてお話しして見度いと思ひます。

これまで傳へられた山田長政の傳紀に依りますと、長政が漂然と暹羅の國に渡つて行つて、當時暹羅の國と六昆と戰爭をして居る最中で、長政が、その戰の批評をしたが爲めに、それではお前一つやつて見よと言はれて、戰さに従事したといふことになつて居りますが、それには多少誤傳があるやうに思はれます。先刻お話し申しました「クンロワン・ハーワットの陳述書」の中にブラナレス王の記録がありまして、此の王は十六世紀の中頃に位に居られた方でありまして、この王の時代に南の方のバタニー六昆北の方のチエンマイ・チエンセン等の地方を征伐して、大いに國境を開いたのでありますが、戦後に於て軍隊を整理して六つの軍團を作りました。その軍團の中にアーサー・ジツボンといふのが見えて居ります。即ち日本軍團といふ意味であります。ところがもう一つは暹羅の法典類を輯めたもので「コットマイ」と云ふ記録の中にアーサー・ジツボン將校三人の知行高が擧げてありまして、其の筆頭に、オクチャー・セナピモック一千ライと見えて居ります。このオクチャー・セナピモックと云ふのが山田長政の暹羅名でありまして、寛永三年の暹羅の國書に「握雅・司臘毘目」と書き表されて居ります、この人名の読み方は近來まで不明でありましたが、三木榮君の研究で讀めるやうになりました。尤も日本人オクチャー・セナピモックの活動を最初に書いたものは、長政と同時代にシヤムのオランダ商館に居りましたフワンフリートでありまして、これを山田長政と書きかへたのは、英人ウツドであります、この人はシヤム史の著者で今日尙シヤムに居住して居ります。

一千ライと云ふのは一ライが、四百八十坪に當り、石高に致しまして約八萬石見當かと思はれます。元和七年に金

地院傳長老が山田長政の來狀に加へた註書に、「大久保治右衛門六尺、山田仁左衛門暹羅へ渡り有付今は暹羅の仕置を仕候由也」とありますのも此の邊の消息を傳へた事かと思はれます。

即ち長政は何の目的もなく漂然と渡つて行つたものではなく多少この日本軍團を目標として渡海したものであらうと思はれます。それで見ますと日本町には御朱印船系統の人々と、又斯ういふ軍團から流れ込む人などがあつたと思ひます。それは一六二三年(元和九年)長政等の殘黨が、アユチャを追ひ出され六昆からカンボヂヤに逃げて行つた時に、暹羅の國王から將軍秀忠に書を送つて日本人の取り押さへ方を懇願して參りました事に對して、秀忠からの返書に、吾邦の商士、彼の地に淹留する者、彼れが援兵となり、貴國の攻兵を防ぎ、之れを戮せんと欲すれども、吾邦と和交の本意にあらずとの思慮、固より可然の理と雖、更に猶豫に及ばず、商客輩利を重んじ、欲に耽る、此の如きの姦黨は、争でか其の罪を免かれん、速に使を遣し征伐せしむる事、其の意に任すべし、勿怪々々」と申して居ります。

此の書中の商士<sup>△</sup>とありますのが、これは商と士であらうと私は思ひます。その商と言ふのは即ち御朱印船系統の町人で士といふのは倭寇系統の武士であらうと思はれます。元來倭寇は支那が八幡船と申す通り、八幡大菩薩の旗を押し立て行つたのでありまして、弓矢八幡信仰の事から武士であるといふことは明かに判る。その連中がアーサー・ジッポンなどに這入り込んだのであります。

今日南洋の國々を歩いて見ましても、日本の居留民の中にはやはり倭寇系統と御朱印船系統とがあるやうでございます。地道に商賣をやつて行かうと云ふ側の人もある代りに、又一獲千金を夢みて、これ等の人々の間を轉つて廻る豪傑も少くないやうに見受けられました。斯う云ふ側の人々は昔ならば確に倭寇系統に屬する人達であります。かう云ふ種類の人々がなくならぬ限りわが國民の南洋發展は覺束ないものであります。

それは昔も今も變りはない。幕府が「此の如きの姦黨いかでか罪を免れん」と突放して保護を加へなかつたのも無理はありません。

長政はブラチャオ・ソントム王に仕へまして、軍功を立てだん／＼取立てられて一方の勢力となつたのであります。が、その相手にオクヤ・カラホームといふ大將が居りまして、長政の勢力を忌み、六昆王として敬遠したのであります。ところが間もなくして、カラホームの計中に陥つて毒殺されました。長政の死後、オークンといふ子供が居りましたが、カラホームの軍に攻められて六昆を落ちてカンボヂヤに逃れました、それから先は分りませぬ。其後カンボヂヤに落ちて行つた日本人が、カンボヂヤ國王を援けて、アユチャを攻める爲めにメナム河口に向つたと云ふ情報がありまして、その時にアユチャの政府からしてオランダ商館に對して援助を頼んだ。さうしてオランダでは十艘の軍艦を出して之を防ぐといふことになり、その時の報告に、「日本人は七艘のジャングに乗つてメナム河口に入つたといふ記録がございますが、その當時のジャングは四十八人乗であつたやうでありますから約五十人と見て七隻で彼は三百四五十人の人數になります。落こぼれが三百四五十人としますと、日本町全盛の時代には相當の人數であつたと考へられます。一體日本人が、没落したのはいろ／＼の事情もあつたのであります。その間最も大きな原因はオランダ人の讒訴でありまして、それは日本人を追出して商賣を獨占する計略であつたのであります。當時、シヤムに於ける日本人の商業の主たるものは、鹿皮の取引でありまして、殆んど九割まで日本人の手に占められて居たの

でありまして、日本人没落の結果この商賣がオランダ商館の手に移り一六三四年以後商館はその獨占權を獲得したのであります。それはその年商館は約七千枚の鹿皮を平戸に積出して居りますが、其翌年には一躍十萬枚送り出して居ります。オランダ人が日本人を追出した後に完全に日本人の利權を奪つて了つた事は、この數字に依つても明かに知る事が出来ます。

日本人を暹羅から追出す事について要路の大官に運動した者はファンフリートでありまして、此の事は商館の記録に明に残つて居ります、その當時日本は鎖國になりまして、日本町の人々は本國との連絡を斷たれて、一方に於ては日本町からは追出されるし致しまして、獨立の商賣を營むことが出来ず此オランダ商館などに入入をして鹿皮のブローカーなどをやつて居ました。商館の記録の中に日本人の小左衛門、權兵衛といふ二人の者がオランダ商館から金を借りて鹿皮の買占をして居つた者が、こつそり支那人に賣り渡したと云ふ廉で商館出入れを差止められたと云ふ記事が、これも商館の記録に残つて居ります。此の事は誠に残念な話でありまして、これまで日本人が如何に大勢力を有してゐたかと云ふ事は、日本人がアユチャの日本町を立ち退いた當時、鹿皮の値段が暴落したと、商館の記録にあるので察せられるのであり、それが今となつては、その當の商敵たる商館の手先となり、おまけに、出入を差止められると云ふミジメな情態に立ち至つたのであります、斯の情態は單りシヤムばかりではなく南洋日本町全體同様であります、丁度その頃にオランダが六昆の錫の買占を許可されましたその許可證を送り届けるに就いてトンキンから來た日本人の「リゼイモン」と云ふ者に託した事が、これも商館の記録に残つて居ります。延寶年中異國に住宅之日本人二十九人とある記録の中に「東京男一人和田理左衛門」と見えて居るのが、この「リゼイモン」であらうと思

ひます。トンキンなりアユチャなりの日本町の人々が互に往來して居たらしい事はこれによつても知る事が出来ま

す。

丁度その前後にファンフリートが品物の受取勘定の事から暹羅の政府と仲違ひを生じて、政府ではファンフリートを捕縛するといふことになつて詮議して居りました時に日本人の頭取「タヨマン」と云ふ者が彼れをかくまつて呉れたと云ふ事が、これ亦商館の記録に残つて居ります。この「タヨマン」と云ふのが、長政没落後日本町の肝煎をして居た糸屋太右衛門であります、元和寛永の頃は男伊達の盛な時分でありましたが、この失意の日本町に居りましても任侠の風を失はなかつたのであります。オランダ商館のケンベルが一六九〇年にバタヴィヤから暹羅に航海の途中その船に平戸生れの日本人が一人居りました、「ハンゼモン」と云ふ者で、オランダ語も出来る、シヤム語も出来る、非常に率直な男でありましたが、八年間ジャガトラに行つて居た間にその家内がポルトガル人の妻になつて女の兒が一人出來て居た、氣の毒な男であると、書いてありますが、先刻申上げました延寶書出の中に、暹羅男九人とありまして、其の筆頭に木村半左衛門と見えて居りますのが、この「ハンゼモン」であらうと思はれます。男九人とあつて女の名が見えて居りませぬ事から見しても、この逃出した家内は日本人ではなかつたであらうと思はれます。又實際日本人であれば夫の留守中に逃出すと云ふ事もありますまいと思はれます。ジャガトラは當時日本からカリシタンを流した所でありまして此の地には、澤山の日本人が居ましたので、半左衛門が八年間も此處に行つて居たと云ふ事は、故郷の人々に會ひ、風の便りなども待つて居た事であらうと思はれまして一掬の涙なきを得ませぬ。ケンベルがこの半左衛門を見た時に、日本人の不思議な存在と言つて居りますが、オランダ町と日本町とは四五間位の堀割を

隔て、目と鼻の間でありまして日本人の様子は十分に判つて居る筈であります。そのオランダ人が不思議な存在と言つて居るのから見ますと、その頃は日本町にも日本人らしい影はなく恐らくはこの半左衛門が、日本町の最後の一人であつたらうと思はれます。

アユチャの日本町につきましては今のところこの位の事しか判りませんが、そこで私はもう少し附け加へさせて戴きました。日本町がどうして滅んだかといふことを、日本側の事情から言はして戴きたいと思ひます。私は海外の日本町は單りアユチャに限らず、全部が倭寇の足溜りから發達したものであつたらうと思ふ。倭寇は南洋の殆んど全面に互つて居たのでありますが、その足場が日本町になつたと思ひます。倭寇は室町時代から戰國時代にかけて殊に盛んでありましたが、その當時彼等が日本の國を飛び出したとろの動機に就ては、當時の社會相が大きな影響を齎らしたと思ひます。

御承知の通り戰國時代には非常に博奕が流行りました。家々の壁書などを見ても博奕を禁ずるといふことが非常に澤山出て居ります。尤も勝負事は平安時代から上流の御遊びなどにもありましたが、これは風流の御慰みでありまして性ちの悪い勝負事は元來陣中の手すさびに行はれたもので鎌倉以後であると思ふ。殊に戰國時代には盛んに行はれました。これは當時の記録に澤山存在して居る。この博奕の風が一か八かの氣風を煽り立てたものと思はれます。戰國時代の氣風を代表する者は織田信長であります。信長の事は織田家右筆太田資房の書いた信長公記や尾張の住人道家祖看の書いた道家祖看記などに見えて居りますが、永祿三年五月十八日、今川義元が桶狭間に陣を取つたと云ふ注進がありました時に、信長は「義元首をはね候か我等打死せむ」と覺悟を定めて、夜半過に起き出で、湯漬を命じ

具足を着けて床几に掛け、小鼓取りよせ「人間五十年下天の中を比ふれば夢幻の間なり、一度生を受け滅せぬ者のあるべきか」と、三度舞つて小姓七八騎を従へて城を出たと見えて居ります。

尾張の國の天台寺に天永寺と云ふのがあります。その能化僧の天澤と云ふのが、關東下の折節甲斐の國を通過し信玄館に伺候して、いろ／＼物語の末、信長公には何か御道樂がおりかと訊かれて、「舞と小唄數奇にて候」「人間五十年下天の内をくらふれば夢幻の如くなり」と云ふ敦盛の一番より外は御舞候はず候」と答へて居ります。「人間五十年」の一句は果して信長會心の文句であつたのであります。信玄これを聽いて暫時感慨に耽つて居りましたが、やゝあつて「外に何かある」と訊きますと天澤答へて「小唄をすきてうたはせられ候」と申すと、「異なるものを好かれ候、いかやうの歌ぞ」と問はれて、天澤答へに、「死のふは一定、しのび草には何をしよぞ」とあります。「死のふは一定、しのび草には何をしよぞ」と云ふ意味は、人間どうせ一度は死ぬ、一生の思出に何か一仕事や二度いものだと云ふ程の心持でありまして、この小唄の意味と「一度生を受け滅せぬものゝあるべきか」と云ふ諺の文句とは同一の思想を表してゐると私は思ひます。斯ういふやうな人間どうせ一度は死ぬ、と云つたやうなイライラしい氣分が、信長には一杯であつたやうでありましてこの氣分が信長をして單騎桶狭間に槍をいれさせたものであると思ひます。而してこの氣象が戰國時代の一か八か乗るか外るか時代の相を代表するものでありませう。かう云ふ氣象が博奕の流行に一層拍車をかけられて、倭寇の發展ともなり、又萬里侯を望んで南洋にとび出した長政一流の冒險ともなつたものでありませう。

然しながらさういふ氣分は或は氣風は少くとも家康の性分には合はない。徳川家は後に例のペルリが來て、通商を

請うた時にも、祖法によつて斷ると云ふ事になつて居りましたが、其の祖法と云ふ語は權現様御遺法と云ふ語の漢譯でありまして、徳川一代は萬事家康の遺訓に準據して終始されたのであります。家康は「凡そ人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し」「不自由を常と思へば不足なし」等と申しまして萬事地道に行くと云ふのがその處世の大方針であります。我が國民の處世哲學を最もよく表現して居るのは、諺であります。それは多くは徳川期に發達したものであります。その諺を見ましても「待てば海路の日和」「商法は牛の涎れ」「石の上にも三年」など、云つた風に忍耐、辛棒と云ふのが共通の思想であります。これは取りも直さず、家康の處世方針そのまゝの教訓であります。それに就て面白い話があります。家康が未だ秀吉に仕へてゐた時分に小田原攻めの時に、堀久太郎の手が一陣を打ち家康が二陣に控えて居りましたが、家康はかね／＼馬の名人で海道一の馬乗りと言はれて居りましたが、恰度小田原の手前の丸木橋に差しかゝつた時に、堀方では此處で一つ、海道一の馬の乗りやうを見ようではないかと云ふことになりました。道の兩方に分れて控えました。そこへ家康が馬に乗つてやつて來ました、どうするかと觀ておりますと家康は橋の袂で、ヒラリと馬から降り、馬は舍人に曳かせて遙かの上手を渡し、自分は後先き家來に手を取られて、橋をよちよちと渡つて行きました。之れを見た堀方ではこれが海道一の馬の乗りやうかと、呆れ果てゝ居りますと、流石は堀政秀、英雄英雄を知るで、「馬をも傷めず、人をもいためずと云ふ大坪流の極意はこれぢや」と膝を叩きました。さういふやうな石橋を叩いて渡るといふ流義が、家康の氣風でありまして、さういふ氣風が又徳川家の政策の根本方針で、それが色々のところに現はれて居るのであります。

二代秀忠は一から十まで權現様の御遺法を遵奉した人で、家康の命日になるとその前の日から手を洗つて、その手を膝に上向けて徹夜をした。手が汚れると明日の御命日に恐れ多いからといつて靜坐して居つたといふやうな人で、もう何事でも總て家康の遺法その儘を行つた人でありまして、暹羅國王の書信に對して我國の商士彼の地に淹留する者元來無頼の徒である故に征伐御勝手と突放して一向に保護を加へる意思がなかつたと云ふ事も、それでよく讀めると思ひます。さういふ事は一か八かといふ氣風を改めた家康の方針である。だからして一面に於きましてはその勝負事の氣風を匡正すると同時に、一面に於ては學問を奨勵して、戰國殺伐の氣風を改めて行かうといふ方針も採つて來たのでありますから、徳川の鎖國と云ふ事もこれは單に島原の戦は切掛けになつただけでありまして、その奥底に於きましては、全國に斯ういふ投機的氣風といふものを改めさせて、内國だけのミツチリした政策を行つてゆこうといふ一種のモンロー主義であると思ひます。さういふ意味で南洋の日本町を突つ放したのであらうと思ひます。

茲にモンロー主義などいふ言葉を使ひましたが、わが國は古來盛に外國の文化を輸入して居るのであります。その外來文化を殆んど無批判に飽食した後には必ず、門戸を鎖して靜に之れを批判し吟味し取捨し消化し、する時期が參ります。この時期が即ち鎖國であります。例へば推古時代から盛んに外國の文化を攝り入れましたが、約三百年経つて平安中期に至つて、遣唐使の廢止となつて國粹思想が擡頭して居ります。その結果として純日本流の藤原文化が興りました。又室町以後盛んに外國と交通しましたが、凡そ二百年にして徳川の鎖國となつた。先には約三百年であつたが今度は二百年にして此の時期が到來しました。これは交通が頻繁であるから分量が多くなる、隨つて百年早くなつたのであります。この寛永鎖國の結果消化された純日本文化が元祿の文化であります。ところが明治以後になりまして知識を世界に求めるといふ御方針に依つて、盛んに又外國文化を攝り入れました。それより約百年今日に於き

ましては思想上に於ても殆んど國體の尊嚴を冒瀆しはしないかと危まれる位に、外來の思想に心酔して参りました第三回目の鎖國が當然來て好い時期になつて居ります。

ところが、是に國際聯盟の脱退といふ一事象が現れて参りました、これは一種の鎖國と見て見られぬ事もありませぬ。畏れ多い事ではありますが、皇太子殿下の御命名なども從來支那の文獻の中に出典を求めて居られたのが、今度は明治天皇の詔勅の中から御選定になつたやうに拜聞して居ります、又國家試験に國史を課するとか、軍人の佩刀を日本刀に改正するとか云ふやうな噂も聞く事でありまして、國粹擡頭の機運は種々の方面に於て熟して來て居るやうに見受けられるのであります。私はかくの如き國史の成跡に鑑みまして、所謂危險思想怖るゝに足らぬ。我が國民精神の中には十分に之れを取捨するだけの健全性を有して居る、それは三千年の歴史が、之れを證明して居ると確信して居ります。

かく考へまして、南洋日本町の遺跡を見ます時に、これは過去に於けるわが國文化の清算の跡を見るやうな心持がいたされまして、それで漸く帳尻が合つて居るやうにも思ひ直されたのであります。これで以て今日の講演を終ります。(昭和九年一月卅日於外務省文化事業部)

